

御嶽山北西山麓での約5000年前のスコリア流堆積物の発見とその意義

Discovery and meaning of the Scoriaflow deposit about 5000 years before on Northwestern slope of the Ontake volcano.

鈴木 雄介 [1]; 田中 倫久 [1]; 千葉 達朗 [1]; 塩谷 みき [1]; 伊藤 達也 [2]

Yusuke Suzuki[1]; Michi-hisa Tanaka[1]; Tatsuro Chiba[1]; Miki Shioya[1]; Tatsuya Itou[2]

[1] アジア航測; [2] 岐阜県・下呂土木事務所

[1] Asia Air Survey; [2] Gifu pref.

岐阜県では御嶽山の火山防災の基礎データの収集を目的として、御嶽山西側地域の調査を行っている。2005年と2006年にかけて、航空レーザ測量を実施し、広範囲の1mメッシュの詳細地形データを取得した。このデータから赤色立体地図を作成し、微地形判読を行なうとともに、北西山麓の現地調査を行なった。その結果、以下のような堆積物を確認したので報告する。

スコリア流堆積物

山頂から約6kmの濁河温泉北西約2km 標高1520m付近の河岸段丘上で、スコリア流堆積物を発見した。直下の土壌から5205 ± 21yrBPの14C年代測定結果が得られた。このスコリア流堆積物をもたらした火口については、流域の源頭部に位置する五ノ池火口の可能性が高いと考えている。これまで御嶽山の最新のマグマ噴火は約2万年前の三ノ池溶岩を覆う五ノ池スコリアと考えられていた(小林1975)。五ノ池スコリアは御嶽山山頂部の五ノ池を給源としていたと考えられていたが、年代は知られていなかった。五ノ池火口と火砕流堆積物の確認された露頭と高度差は約1270m、H/Lは0.23であり、五ノ池火口までの河道沿いの平均傾斜は約12度である。また、スコリア流堆積物は、一部弱溶結を示しており、定置温度を推定するために、古磁気学的な検討を進めているところである。

水蒸気噴火の堆積物

濁河温泉周辺の標高1520m付近の地点で、水蒸気爆発によると考えられる細粒灰白色火山灰層を確認し、少なくとも周辺150mまで連続することを確認した。周辺に火口地形は確認できていない。御嶽山の北西山麓は温泉などの地熱活動も活発な地域であり、地すべりなどによって誘発された水蒸気爆発である可能性もあるが、今後調査を継続する予定である。御嶽山の有史時代の噴火としては、1979年の噴火(水蒸気爆発)及び1991年の小噴火が記録に残っている。一方、地質調査結果からは過去約7,300年間に少なくとも5回の水蒸気噴火があったことが知られているが、その詳しい分布範囲や火口は明らかではない。